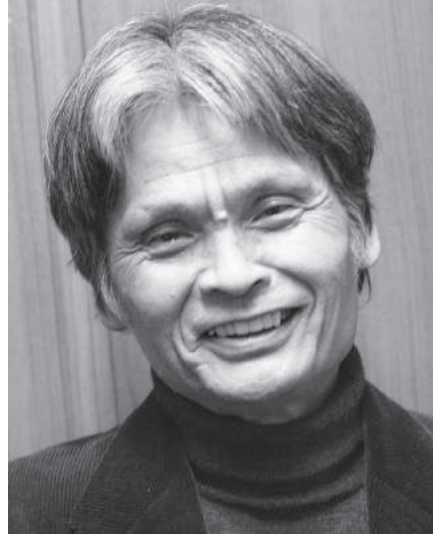


追悼—— 小松幹生氏



劇作家
1941年生まれ、高知県出身
2016年8月12日逝去

ゲラがありがとうございました

岡部耕大

突然の訃報に困惑している。

小松幹生さんとは長い交友であった。四十余年前、演劇雑誌「テアトロ」にわたしの劇評を書いてくれたのが小松幹生さんである。よく内容を吟味した好意的な劇評であった。絶賛ともいえる。正直、嬉しかった。それから小松幹生さんの劇評だけが頼りで演劇をやっていたような気がする。

本人にお会いしたのは、わたしが青年座に書いた本が上演された青年座劇場だった。「ゲラがありがとうございました」といった挨拶だった。わたしの『肥前松浦兄妹心中』を掲載してくれたのも小松さんだった。劇作家ならだれもが覚え

があるかもしれないが、自分の書いた戯曲が初めて活字になった喜びはなんに例えようもない。「テアトロ」が輝いていた。

ただ、日常の交友はなかった。劇作家の交友とはそうしたもののなのかもしれない。「劇作家は所詮は一人ですね」「そうですね」といった会話を劇作家協会を結成した集まりでした記憶がある。二人ともこの会話の矛盾には気づいていなかったのかもしれない。

しかし、劇作家協会を結成したお陰で劇作家の脚本料は確かになった。それまでは脚本料のことも口にする劇作家は卑しいといった雰囲気があった。一年を掛けて書いた脚本料が三十万だった時代である。わたしは映画やテレビのシナリオで稼ぎながら戯曲を書いた。そういった事情にだれよりも詳しくあった

のが小松幹生さんであった。

4、5年前になるか「老人会に誘われました」「入ったのですか」「入りました、老人ですから」といった会話をした。小松幹生さんとわたしとは4つしか違わない。

わたしの昨年の作品『姉しゃま』も紀伊國屋ホールまで観に来てくれた。終演後のロビーで「面白かったですよ」とあの独特の微笑みで誉めてくれた。他の客と会話している間に小松幹生さんは人込みの中に消えていた。あれが最後だった。あれは別離の挨拶だったのか。お別れ会に入間市まで行くとしたが疲れていて動けなかった。小松幹生さんならわかつてくれるだろう。

だれもがいうことだが、小松幹生さん、こんなことになるならゆっくりとあの日語りたかった。小松幹生さん、同じ、いい時代を過ごしましたよねえ。心より冥福をお祈り致します。

新人を支え続けた劇作家

永井 愛

私の戯曲を初めて活字にしてくださったのは、小松幹生さんだった。当時「テアトロ」の編集者でもあった小松さんは、1987年4月号に掲載が決まった『私もカメラ——黒髪先生事件報告』

の初校ゲラを稽古場まで届けてくださった。

まだワープロも普及していない頃で、渡した原稿はもちろん手書き。私は自分の作品を自分の筆跡でしか読んだことがなかった。それが今、どの台詞もどのト書きも明朝体に整えられ、急にイッチヨ前になったようではないか。「どうとう活字になったねえ」と、小松さんの声が、私より嬉しそうに響いた。小松さんはきつと、新人のこういう瞬間に立ち会うのが好きなんだと感じた。

パソコンが普及し、もはや新人が明朝体に特別な反応を示さなくなっても、小松さんは新人の活字デビューにこだわり続けた。特に劇作家協会の『優秀新人戯曲集』が、20年間にわたって毎年欠かさず刊行され続けたのは、小松さんの獅子奮迅の働きによるところが大きい。それがどれほどの仕事量であったのかは、小松さんが亡くなった後、残された仕事をどう割り振るかという段になって具体的に知った。小松さんは入院先でも、生還してこの仕事をやりとげるつもりでいたらしい。俺がやらなきゃ誰がやるという切迫した思いがあったのだろう。

劇作家としての小松さんは、何度か岸田戯曲賞の候補にありながら、受賞には至らなかった。そのことが消えない悲しみになっているとエッセイに

書いていた。そんな思いを抱きながら、小松さんは多くの新人に光をあてようとした。「とうとう活字になったねえ」と、小松さんの声が聞こえてくる。

小松幹生先輩のこと

大谷亮介

私が小松幹生さんと初めてゆっくりお話させていただいたのは、2004年7月〜8月にシアタートラムで上演されたレクラム舎公演「劇作家・小松幹生の仕事」の『刺殺遊戯』に出演した時でした。何本もの作品を大勢の俳優たちがピリピリしながら稽古をしている大混乱の中、決して声を荒げることなく穏やかに話をされていたのが本当に印象的で、なんて大人なんだろうと感じたのを今でもよく覚えています。

それから劇場や飲み会の席で折に触れて芝居の話をしたり、実現はしませんでした。が芝居に誘っていたいたり、常に優しい穏やかな先輩でした。

しかし滲み出る雰囲気は小松さんの作品同様、ある部分は決して妥協を許さない確固たる信念と独特な空気感に満ちていて、小松幹生は小松幹生の作品を本気で演じてみない限り簡単にはわからないと思います。

ご入院先の病院に伺った時、目を輝

かせて演劇の話や、優しい奥様やご息子の話をされていたのが最後になりました。

この文章を書いていると涙が出る思いです。

ありがとうございました。

小松幹生さんと生きた

私の青春

西山水木

小松さん、お元気ですか? 「おお、ミズキ!」と笑って、片手を小さくあげて挨拶を返してくださいますか?

水上勉原作、小松幹生脚色『ブンナよ、木からおりてこい』の子ガエル2でデビューした私でした。当時の「新進気鋭の劇作家・小松幹生」と、後に劇作家協会の仕事で再会し、一緒にするのが本当に不思議でした。

桐朋学園時代に小松さんの代表作

青年座スタジオ公演の『雨のワンマンカー』に出会い、入団を決心し、何とか合格してキャスティングされたのが『ブンナよ、——』でした。稽古場に頻繁にいらして、苦心の台詞がバサバサとカットされるのを、腕組みして整えていらした姿が思い出されます。

思えばなんともすごい言葉の数々でしょう。無常の死の概念と、それでもどうしようもなく生かされ生きている青春の激しい衝突でした。

「いまの俺は本当の俺じゃない! こうありたいと思っている俺が本当の俺なんだ!」

叫ぶネズミの台詞は、若く未熟な私のその後の未来(つまり、いま?)の礎となり、そのツアー中に同期の友を失った後悔の私の演劇人生の支えでした。

青年座の同期、子ガエル仲間の吉田はるみが芝居をプロデュースすることになり、小松幹生さんに挨拶に行こうということ、入院中の小松さんをお見舞いに行ったのが、そのまま別れとなりました。

青年座劇場へのステップをタンタンツと踏む音は、その後何十年経っても変わらず、それはそのまま小松さんと私の時間を戻す魔法の音です。

小松さん、小松さん、私大丈夫でしょうか?

…いえ、いいんです。いつものように話を逸らして、だからやっぱり演劇は面白い、って、お前の芝居も面白い、って、やっぱり褒めてくださいね。褒めてくださいね。

小松幹生さま 棚瀬美幸

ご無沙汰しております。新人戯曲賞、今年も無事に戯曲を読み終えることができました。毎年、小松さんの一次審査依頼メールで夏の訪れを感じ、短く添えられている文章を楽しみにしております。

城崎温泉の劇作家大会から2年が経過しているのですね。あの時、初めて小松さんと15分以上お話させていただきました。あの時、初めて小松さんと15分以上お話させていただきました。あの時、初めて小松さんと15分以上お話させていただきました。あの時、初めて小松さんと15分以上お話させていただきました。

以前に副業で著作使用をお願いしました小松さんのコラムを久しぶりに読み返しました。「せりふの時代」を購入しては、小松さんのページを真っ先に読んでいたのが懐かしいです。新人戯曲賞、劇作家大会、「せりふの時代」が小松さんと私を繋いでくれるものでした。それだけでしたが、それは私が劇作家であるために必要で救いました。

小松さん、次の人生はどうされますか? 願わくば、小松さんに叱っていただけの距離で次の人生を歩みたいですが。